

平成 26 年度 学校経営計画及び学校評価

1 めざす学校像

<p>≪創立 2 年目を迎え、下記①②③の 1 年目の目標をより充実する方向で『学校像』を設定し、今後、同種（知的障がい支援学校との併設置校）の高等支援学校のスタンダード（標準）となるような学校づくりをめざす≫</p> <p>① 知的障がいのある生徒の能力や可能性を最大限伸ばし、健やかな身体と豊かな情操、道徳心を培うとともに、自主及び自律の精神を養う、学校。</p> <p>② 地域社会で自立して生きていく力の育成を図るため、職業及び生活との関連を重視し、働くための知識や技術を育み、社会人としての生活習慣や勤労を重んずる態度を養う、学校。</p> <p>③ 「ともに学び、ともに育つ」教育を推進するために、併設される摂津支援学校と協同して、地域の小・中学校・高等学校等への支援体制を整備し、支援教育のセンター的機能を有する、学校。</p>

2 中期的目標

<p>本校学校経営の柱とも言うべきものであり、「中期」（3 年～5 年）のスパンで考慮した場合、本年度（H26 年度）も昨年（H25 年度）と同様のもので臨みたい。</p> <p>① 高い専門性を有する学校をめざす。（①教職員一人ひとりの授業力を向上させる。②子どもの障がい特性を考慮した適切な「集団指導」と「個別指導」の充実を図る。）</p> <p>② 学校組織（学科・学年・校務分掌等）の確立と人材育成。（①一人ひとりの教職員の適性や能力に沿い、適材適所をめざした組織の構築。②一人ひとりの教職員の可能性を伸ばす人材登用と人材育成を行う。）</p> <p>③ 地域への認知促進と地域との連携。（①地域の特性を考慮しながら進路指導を進めるなかで、地域企業との結びつきを強める。②地域の社会資源と連携し、生徒の社会貢献意識を高める。③多くの人々が新しい本校を知って頂き、さらに本校へ足を運んで頂けるような取り組みを充実していく）</p>
--

【学校教育自己診断の結果と分析・学校協議会からの意見】

学校教育自己診断の結果と分析 [平成 26 年度 12 月実施]	学校協議会からの意見
<p>四捨五入をして、50%以上の否定的な回答があった事項を次に掲載し、（ ）内に具体的改善策の例を記述。</p> <p>【生徒からの回答】</p> <p>7 自分の考えをまとめ、発表することが多い。（一つひとつの「授業改善」に取り組む）</p> <p>14. なんでも相談できる先生がいる。（人的配置も含めて、その環境づくりに努めていく）</p> <p>21 環境・国際理解・福祉ボランティアなどについて学習する機会がある。（質問文が多義的であり、質問文の改善）</p> <p>30 近隣の学校や地域の人々との交流が活発である。（地域連携部を中心に、そのような取り組みを充実させる）</p> <p>【教職員からの回答】</p> <p>15 人権尊重の教育の推進にあたり、外部講師や諸施設の活用が進められている。（そのような機会を設ける）</p> <p>16 道徳教育は、年間全体指導計画に基づき、継続して行っている。（意図的、計画的に学校教育全体を進める方策を立てる）</p> <p>17 環境・国際理解・福祉ボランティアなどについて、子どもの発達段階や実態に即して、教育活動に取り入れている。（質問文が多義的であり、質問文の工夫が必要。もう一度、「環境」「国際理解」「福祉ボランティア」の見直しをかける）</p> <p>32 教職員は PTA 活動に参加している。（PTA 役員とも相談し、教職員との連携をどう図っていくべきかを模索する）</p> <p>38 近隣の学校などとの校種間連携の機会を設け、教育活動全般に生かしている。（関係部署がそのような機会を設けられるような計画案を立てる）</p> <p>これらについて、今後対策を立て、PDCA サイクルを使って、改善に努める。</p>	<p>【第 1 回】①「交流・共同学習」の充実について。→充実の方向で鋭意努力中。②「就労をめざすことを経営計画に明確に表明することについて」→来年度に表記の予定。③「防災への取り組み状況について」→摂津支援と共同で防災マニュアルを作成中 ④「学校教育自己診断票の改定」→改定作業を進めているところ。</p> <p>【第 2 回】①「社会自立に繋がる学科の取り組み成果について」→生徒の様子から心構えがついてきた。②「教員の授業力向上」→出来るだけ多くの教員が、他の教員の授業参観ができるような体制が組めるよう努める。③学校教育自己診断票の改定作業の進捗 →KJ 法を活用した改定作業を行っている。わかりやすい文言の設定や、生徒・保護者・教員の分を並列に置き、3者の意識を比較できるような質問文へ工夫を凝らした。</p> <p>【第 3 回】</p> <p>① [進路指導に関する質問]ハローワークの情報について→学校が企業を訪問して情報収集を行う。ネットには乗らない。実習へ出す基準は…学年団・担任・進路担当で課題を見極めて、1 年生 2 年生ともに順次実習を行っている。</p> <p>② 学校教育自己診断について、結果報告だけではなく、改善方策の提示まで期待していた。→本日の委員の方からのご意見も伺いながら改善策を関係部署で立てて、年度当初から PDCA サイクルに則り、鋭意努力する予定。特に、生徒・保護者と教員の評価が分かれるものについては、委員のご意見を参考にしながら、検証し、改善する。</p>

3 本年度の取組内容及び自己評価 ≪中期（3 年～5 年間）ビジョンにたち、昨年度取り組みを踏襲し、定着・充実・発展をめざす…学校の土台づくりのため≫

中期的目標	今年度の重点目標	具体的な取組計画・内容	評価指標	自己評価
高い専門性を有する学校	① 授業力の向上。 ② 個に寄り添ったきめ細かい指導・支援スキルの向上。	① 個々の授業の充実を図る。 i、略案提出。 ii、研究授業は、必ず研究協議を実施。 iii、出来るだけ多くの教員が参観する呼びかけや仕掛け（週間や月間）を作る。 iv、後期（1 月頃）に実践研究会の開催。 上記は、本校指導教諭（研修・研究担当）を中心とした取り組みとする。 ② 個々の難しい事案について、生活指導部と校内支援担当（コーディネーター）がコラボした、「ケース会議」を開き、教育・支援方針を打ち出し、実践する。	① 授業力向上につなげる研究授業の開催 一人年 1 回、初任者 3 回 i、授業略案の提出（観点：キャリア教育等の目標像と合致した授業を行っているか） ii、振り返りシートの提出 iii、研究協議の設定。 iv、実践研究会の開催 ② 「ケース会議」…その都度、迅速に対応・解決する。	① 年間を通じて、一人 1 回の研究授業の実施（○） <※初任者の研究授業を一人 3 回実施（○）> i、授業略案の提出（○） ii、振り返りシートの提出（○） iii、研究協議の実施（○） iv、実践研究会の開催 1 月 20 日を行い、外部（市町村中学校、支援学校の教員が集い、盛況であった（○） ② 「ケース会議」の開催 i、重大な生徒指導案件に関して。 ii、対応が難しいケースについて、 首席、生徒指導部長、コーディネーター、学年主任、クラス担任、及び管理職が入った指導会議を迅速に開催し、課題解決を図っている。 また、Co. を中心として、子ども家庭センターや市役所福祉部との連携を行い、家庭への支援も行っている。（◎）

府立とりかい高等支援学校

<p style="writing-mode: vertical-rl; text-orientation: upright;">学校組織(学科・学年・校務分掌等)の確立と人材育成</p>	<p>① 中期的ビジョンに立った、校内組織の構築。</p> <p>② 組織の透明性と業務のスピード化。</p> <p>③ 人材の育成。</p>	<p>① 教頭・首席を組織の「要」とし、3部門で3年後を見据えた組織構築を図る。 ※今年度は、「係り」から分掌組織への移行期と捉え、業務内容・業務分量を精査しながら「長」を決めて、少人数でチーム活動を行う。</p> <p>② 機動的組織運営を図るために、職員同士のコミュニケーションを大切にし、きめ細かい「報・連・相」を浸透・徹底する。</p> <p>③ 管理職、首席・指導教諭、教諭、講師等あらゆる職種の人材育成(キャリアアップ)と人材登用。</p> <p>④ 「進路指導」「学科指導」「一般指導(クラス・教科指導を含む)」の三位一体をめざすために、職員間の意思疎通を図る。</p> <p>⑤ 摂津支援との兼務を生かして、本校で完結することなく、広い視野で連携を探り、両校の発展に努める。</p>	<p>① 1年後、2年後を見据えた組織運営と組織構築。「係り・担当」から「部門」へ。少人数チーム対応から「部門」対応へ進めていく。</p> <p>② 始業前打ち合わせ(毎朝)、職員会議(月2回)・学年会議(月2回)分掌会議・委員会会議(月2回)、企画運営会議(月2回)</p> <p>③ 適切な人材配置と活躍の「場」の提供。チーフには、若手教員を配置し、年配教員がバックアップ役に回る。</p> <p>④ 職員間の情報共有をベースに、共通理解と意思疎通を図るための会議設定を行う。(週1回)学年に進路担当者を置き、進路指導部と学年との連携を図り、学科担当者の学年配置により、学科と学年の結びつきをより緊密化する。</p> <p>⑤ 施設・設備の共用を効率的、円滑に進めるために摂津支援との連携会議を各教科や分掌・係り単位で行っていく。</p>	<p>① 来年度、学校の完成形を見据え、各校務分掌で、業務分担をもう一度見直し、首席会を中心として、組織改編に努めている→首席会から各分掌長に課題の提示を促し、それを集約し企画運営委員会へ諮る(○)</p> <p>また、本年度は教職員一人一台のPC機器が配備され、情報の迅速な伝達をITC機器を利用しながら、ハイパーリンク機能を使った迅速な情報交換に努めた。職員会議の運営についても、ペーパーレス化も推進させ、教職員の業務軽減に寄与した。(○)</p> <p>② 始業前の管理職・首席・指導教諭・学年主任・教務主任・進路指導主事との打ち合わせにおいては、迅速な情報交換に努め、そのエッセンスを8:30からの職員朝礼で伝達する仕組みが確立された。滞りなく計画通り、開催している(○)</p> <p>③ 経験年数の比較的少ない若手教員を分掌長等の校内の要職に抜擢。経験年数の比較的多い教員が、若手教員の育成とバックアップをする組織機能が確立されたと見る。そのことが、学校の活性化を呼び込む仕組みとなっている。(○)</p> <p>④ 個別指導の形態である「進路指導」を行う上で、第2学年では週1回の学年会議には、「担任2名」だけではなくクラス付きの「学科長」が入り、加えて進路指導Co.が参加して、学年、学科、進路の三者でさまざまな視点から協議を行い、例えば実習先のマッチング作業等、組織として機能するようになった。(◎)</p> <p>⑤ 併設校である摂津支援との連携を強めるため、施設・設備の円滑な共用を進めるために、本年度から「特別教室使用者連絡会議」を年間2回～3回特別教室毎に開催し、実際の運用について話し合いを持つことで解決を図る仕組みを作った。(○)</p>
<p style="writing-mode: vertical-rl; text-orientation: upright;">地域への認知促進と地域との連携</p>	<p>① 地域企業とつながる。</p> <p>② 地域住民とつながる。</p> <p>③ 障がい者理解推進。</p> <p>④ 同種校との連携・提携。</p> <p>⑤ 地域への発信。</p>	<p>① 職場実習(インターンシップ)先の開拓、就労先企業の開拓。</p> <p>② 地域社会資源の活用と連携。 ・オープンスクールの開校 ・「喫茶・販売」や「学校際」を通じて、地域住民の利用や地域住民の認知度高める。</p> <p>③ 共生推進校や近隣の高校との交流やセンター的機能を高める。 特に、近隣の高等学校との交流実現。 (*交流学習・共同学習をめざす)</p> <p>④ たまがわ高等支援・すながわ高等支援とスポーツや文化活動で、切磋琢磨する機会を作る。</p> <p>⑤ HPや印刷媒体を使った地域への周知。</p>	<p>① 長期休業中(夏期休業)を活用した、職場実習先の開拓を全教員が行う。企業へアプローチを全員で100社確保。企業対象の学校見学会の開催(年1～2回)</p> <p>② 地域の社会資源とタイアップし、生徒の社会的自立を狙いながら、生徒による社会貢献及び職業実習の取り組みを行う。オープンスクールの開催(年1回、3日間)</p> <p>③ 1ないし2校継続的な取り組みが可能な相手校を探していく。</p> <p>④ サッカー大会、カルタ大会(百人一首)、音楽祭等。</p> <p>⑤ 「地域だより」年5回発行。</p>	<p>① 産業現場実習先の確保を行うために、全員が進路指導にかかわる意識を持ち、結果100社以上の法人・事業所を確保した。(◎)</p> <p>本校と企業を結ぶ「企業フォーラム」を摂津支援と共催で11月下旬に開催し、50名近くの関係者が集る実績をあげた。また、随時企業関係者を学校に招き、生徒の実態を見てもらうことによって、本校の周知を図った。中小企業同友会会合に出席し、知的障がい者雇用に関する啓発活動を行った(◎)</p> <p>② 本校「生活科学科」では、摂津大学と連携し、本校生徒の週1回の清掃活動を受け入れてもらい、順調に進んでいる。さらに「生産技術科」においても、同大学との連携のもと週1回の実習を計画している(◎)</p> <p>オープンスクールを8月下旬に3日間開催する。670名の参加者があった(◎)</p> <p>③ 摂津高等学校サッカー部と本校スポーツ部との交流を7月に行った。有志生徒10名が参加。来年度も継続の方針(○)</p> <p>④ 12月下旬に大阪府教育センターにて行われた「教育フォーラム」のランチタイムコンサートに2年連続で、摂津支援とコラボで音楽部が出演。たまがわ高等支援との「カルタ大会」交流(本年度3月に実施予定)(○)</p> <p>⑤ 「地域だより」を通算5回発行し、地域への認知度が上がり、地域の公民館から、「江州音頭」を媒介とした住民との交流も実現した。(○)</p>